Osaka University Knowledge Archive

Title	对日汉语书面语教学研究 : 以培养学习者的书面语基础运用能力为目的
Author(s)	Liu, Wenwen
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55713
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　劉 文 弍（LIU WENWEN）　）	
論文題名	対日汉语书面语教学研究 —以培养学习者的书面语基础运用能力为目的— （　日本人学習者に対する中国語の書面語教育研究　） （　—学習者の書面語基礎運用能力の育成を目的として—　）

論文内容の要旨

書面語は中国語文体の一種類である。従来の研究において、第二言語としての中国語書面語教育を扱った研究はさほど多くないが、近年第二言語としての中国語教育の発展とともに、この分野は中国で徐々に注目されるようになっきてた。一方、日本では、中国語の文法研究は盛んに行われているものの、教学に関する研究は決して多くない。また教学研究も特定の文法項目を如何に教えるのかという問題に限られている。

本研究は、日本人学習者に対する中国語の書面語教育研究をテーマとし、日本人学習者の中国語書面語基礎運用能力の育成を目的とする。日本人学習者の中国語書面語基礎運用能力の育成とは、学習者が中国語書面語の知識を獲得し、そしてその知識を基に書面語で簡単/基本的な文章が作成できる力を育成することである。また本論文では、中国語の書面語の特徴をはじめ、日本人学習者における中国語の書面語に対する意識、学習状況及び誤用等について、全般的且つ体系的に整理する。本論文は全七章で構成されている。

第一章「序論」では、主に研究背景、問題提起、研究方法、研究目的と意義及び本研究の独創性について述べる。

第二章「先行研究」では、主に中国語の書面語及び書面語教育に関する先行研究を体系的に整理する。そして、第二言語としての中国語教育分野及び日本人学習者に対する中国語教育分野における中国語書面語に関する研究を紹介し、研究の現状を体系的に示す。本論文では主に①外国語教育における文体に関する研究②文体の分類③第二言語としての中国語書面語教育④日本人学習者に対する中国語の書面語教育の四点を中心に論じる。

第三章「中国語の書面語」では、先ずこれまでの先行研究を整理し、中国語書面語の変遷と発展を簡潔に説明し、現代中国語の書面語の基本的特徴（即ち日本人学習者に対する書面語教育の実践に応用すべき特徴）をまとめた。また、本論文では、文体の具体的な分類と文章の硬さの測定方法も示した。最後に、教育現場の角度から日中両言語の書き言葉（書面語）の特徴を対比し、日中両言語における書面語の特徴の相違点をまとめた。

第四章「日本人学習者の中国語書面語意識と学習状況」では、主に中国語の書面語における韻律規則や文体マーカーの観点から、日本の某国公立0大学の学部三、四年生計86名を対象にアンケート調査を実施した。アンケートの内容は「中国語書面語の文体に対する認識」、「中国語書面語と中国語口語の識別」、「中国語書面語における語彙と文体の運用」の三点を中心とし、これらを通して日本人学習者の中国語書面語に対する認識と運用状況を考察した。

第五章「日本人学習者における中国語書面語の誤用分析」では、言語資料として、北京語言大学の「HSK動態作文コーパス」内の日本人学習者が書いた作文の一部を採用し誤用分析を行った。作文は主に意見文と叙述文の二種類のジャンルから、テーマを二題選び、テーマごとに70点台、80点台、90点台の作文をそれぞれ10本ずつ抽出した。尚作文のテーマは、HSK試験において出題頻度が高いものを選んだ。以上を踏まえ、本研究では合計81本の作文を抽出した。そして日本人受験者が書いた作文の中で合計626個の誤用が見られた。本章ではそれらについて主に語彙、文章構造、文体と韻律の三つの観点から分析を行い、その誤用が生まれる原因を模索した。また最後に日本人学習者に対する中国語の書面語教育について、教育現場において注意すべき点をまとめた。

第六章「日本人学習者に対する中国語の書面語教育への提言」では、第二言語としての中国語教育について、「有効教育（“有效教学”）」理論に基づいて論じ、有効教育理論の基準と基本原則を示した。また本研究では、第二言語としての中国語の有効教育に影響を与える要素を示した上で、現段階における日本人学習者に対する中国語の書面語教育に存在している問題点をまとめた。以上の理論に基づいて、本論文では「日本人学習者に対する中国語書面語の語彙・構文に関する有効教育」、「日本人学習者に対する中国語書面語の韻律に関する有効教育」、「日本人学習者に対する中国語書面語の文章構成に関する有効教育」及び「日本人学習者に対する中国語書面語の文体に関する有効教育」の四つの観点から日本人学習者に対する中国語の書面語教育を具体的に分析し、各方面の教育実施の際に注意すべき内容を明らかにし、具体的且つ有効的な教育ストラテジーを提言した。

第七章「結論及び今後の課題」では、各章の考察をまとめた上で、本研究の不足点と今後の課題を示す。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　劉文弍　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	古川裕
	副 査　教授	杉村博文
	副 査　教授	眞嶋潤子
	副 査　特任准教授	金昌吉
	副 査　特任准教授	張恒悦

論文審査の結果の要旨

《对日汉语书面语教学研究－以培养学习者的书面语基础运用能力为目的－》（『日本人学習者に対する中国語の書面語教育研究－学習者の書面語基礎運用能力の育成を目的として－』）と題された本論文は、日本人学習者に対する現代中国語の書面語教育に焦点を当てて、日本人学習者の中国語書面語基礎運用能力の育成を実現するための基礎固めを目指した研究である。

中国語は歴史的にも、また現在の状況を見ても、口頭語と書面語との距離がきわめて大きい言語である。日本の中国語教育は伝統的に実用語学として教育を行ってきた性格が強く、会話力、すなわち、口頭語としての中国語運用能力を向上させることを主たる目標としてきたが、中上級レベルの学習者に対する書面語教育については、その必要性は認識を共有されつつも、教育現場でも教育研究においても充分な注意が払われてきたとは言い難い。そのような背景の下で、日本国内における、日本語母語話者を対象とする中国語書面語の教育に的を絞った議論は、中国語教育研究の大きな空白を埋めるものとして評価される。

本論文は全7章から構成されている。

第1章序論では、研究背景、問題提起、研究方法、研究目的と意義が述べられている。

第2章では、この分野における先行研究を批判的に検討し、本研究が日本人に対する中国語書面語教育を総合的に研究する独創的な試みであることが述べられている。

第3章では、現代中国語の書面語の変遷と発展を辿り、書面語の基本的特徴、すなわち日本人学習者への教育において注意すべき点が示されている。この章で記されている20世紀以降の言語政策の変遷については、中国で編まれた先行文献のみを参照したために中華人民共和国寄りの歴史観に偏向した記述になっていることが惜しまれる。

第4章では、日本人学習者の中国語書面語に関する意識と学習状況について、本学外国語学部中国語専攻の3～4年次生に対して行った学習者アンケート調査をもとに、中上級の日本人学習者の中国語書面語に対する認識と運用状況を明らかにしている。このアンケート調査結果により、日本の中国語教育の現場が抱えている問題点が浮き彫りにされ、カリキュラム・教材・教授法のいずれも改善が必要であると述べている。アンケートによる調査は本論文における分析結果の実証性を高めることに貢献している。

第5章では、日本人学習者が産出した中国語書面語作文81本の中から626個の誤用例を摘出し、語彙・文章構造・文体と韻律の面から分析を行い、これらの誤用が生じる原因を指摘し、教育現場に対して、語彙の盲点となっている知識を強化すべきこと、段落構成や文章構造に関する練習をすべきこと、文体に関する意識と知識を増強すべきこと、韻律・リズムに関する教育が必要であることを提案している。ここでなされている誤用分析は、従前の誤用分析の枠組みを踏襲するもので、日本語からの干渉により一層着目した分析こそ必要である。

第6章では、アンケート調査及び誤用例分析をもとにして、中上級レベルの日本人学習者が書面語運用能力を高めるために、教育現場で対応すべきストラテジーについて考察し、近年中国で発表されて注目される有効教育理論の有効性を主張している。その主張は首肯できるものではあるが、今後の教育実践を通じた検証を待つところが多い。

最後に第7章結論では、分析のまとめ、残された課題と今後の展望が示されている。とりわけ、今後は本論文で研究の対象とした現代中国語書面語の様々なスタイルやジャンルを丁寧に見て行く作業が残されている。

本論文は全編を通して標準的で流暢な現代中国語書面語によって記述されており、スケールの大きな問題に取り組んだ労作であると評価できる。その主張や提言には今後の教育実践を通じた検討が必要な部分も残っているが、総じて明確な議論が展開されている。

以上のような点を総合的に判断し、論文審査担当者は全員一致で、本論文が博士（言語文化学）の学位を得るのにふさわしい研究論文であると判断した。